

アメリカ博物館見学記

市立函館博物館 根本直樹

昭和六十三年十一月二十四日 博物館を「教育の場」としてから二週間、財団法人日本博物館協会主催の「米國博物館事情視察団」に加わり、ニューヨーク・ワシントンD.C.・ボストン・シカゴ・サンフランシスコの五都市の博物館巡りをする機会に恵まれました。以下でその際の印象を述べようと思います。

具体的な報告の前にちよつど良いタイミングで、ひとつのレポートを読むことが出来ました。それは神奈川県立博物館で大英自然史博物館前古生物学部長アラン・チャリロク氏の講演の内容から、ヨーロッパとの比較を通しアメリカの博物館の様子がある程度説明していると思われるのです。それによると一九七〇年代の初め同館は新館長を迎え、館長自身がアメリカの最も現代的な博物館を訪れたり何人かのスタッフをアメリカで学ばせたりして新博物館政策をつくりました。その結果、

近いのではないかと思えるのです。つまり、楽しい展示であつたし、また行きたくなるようなアクションを感じさせられるのです。例えば、シカゴ産業科学博物館では七十五の展示コーナーを持ち、その中でも「炭坑」「Uポート」「スペースセンター」の体験型のコーナーがもつとも人気が高いとの事でした。これらとともにアメリカの博物館の展示の特徴はテーマを身近なところに求めている点です。同館の「Food For Life」という展示コーナー

では栄養や健康というテーマを模型やコンピュータなどを使って楽しく説明しています。このコーナーでユニークなのは卵からヒナがcaえる様子を実際に展示しており、子供たちが興味深くのぞいていました。そして展示でのもうひとつの大きな魅力は、復元主義と云つたらよいのでしょうか。メトロポリタン、ボストン両美術館の展示にみられるように、コレクションが生み出された風土、置かれた空間を可能な限り再現している点です。ワシントンD.C.のナショナルギャラリーでの特別展「JAPAN」―大名文化の形成展―でも展示室ばかりでなく館内に茶室と能舞台を復元して日本文化の一端を紹介していました。この復元主義は自然史博物館でのジオラマの精密さからも同様の事がうかがえると思ひます。

また、どこの博物館を見学しても同様に驚かされる点は展示場の二〇〜三〇%以上は工事中なのです。つまり、ひとつのテーマ展示に五年位の年月を費やして、常に展示替えが繰り返されているのです。シカゴ産業科学博物館でも工事中の壁に「Coming March the Human Brain」と新たな展示コーナーへの呼びかけを忘れていませんでした。そしてこのようなアクションは、企業の寄付によって支えられています。

この他企業の寄付は、ニューヨークにあるメトロポリタン美術館の日本語小冊子やアメリカ自然博物館での金曜と土曜の五時以降の入場料免除



メトロポリタン美術館



ナショナルギャラリー

など広い範囲で見学者の利便性をサポートしています。

また、ボストン美術館に昨年開園した日本式庭園「天心園」は日本テレビ会長小林与三氏の寄付によるもので、日本の企業の参画も増えているようです。

アメリカの博物館の楽しさは、展示ばかりではありません。食事するスペースやミュージアムショップでの買物なども忘れることができません。特に印象に残ったのは、ワシントンDCにあるエアアンドスペース博物館に隣接して最近できた一、五〇〇人収容するレストランです。このレストランは明るく、洒落たデザインで楽しく食事ができる空間を見学者に用意してくれています。

また、博物館の利用対象者として幼児への配慮も忘れていません。ボストン美術館では二、三才からの絵画教室が実施されていますし、同じボストンに幼児から小学生までを対象とした子供博物館がありました。つまり、幼児から



エアアンドスペースのレストラン

大人まで幅広い人たちの求めるものが何かあるということでしょうか。まさに百貨店の魅力に共通する要素を持っていました。その証拠にヨーロッパの博物館に比べて、入場者数の多さに目を見張るものがありました。

さて次に紹介する、ワシントンDCにある国立アメリカ歴史博物館はもうひとつのアメリカを感じさせてくれました。それは最近の展示コンセプトから生まれた「AMERICAN PERFECT UNION」という常設展の見学からでした。新しい展示コ

ンセプトとは、歴史を表す姿勢として「物」から「人」を中心に構成することを意味しています。この展示の内容については、リーフレットから引用してみると「第二次世界大戦開戦の間に十二万人の日系アメリカ人は、彼等の故郷や社会から強制的に追い出され、さらに、合衆国政府によって建てられた収容所に追い込まれた。彼等の多くは、鉄条網の中で武装した看守に監視されて、翌年から三年間をこで過ごすことになった。さらに完全なる結合・日系アメリカ人と合衆国憲法は、民族的偏見や恐れが、市民の権利と国家の権力との間の繊細なバランスを狂わせたこの期間を探る。それはこれらの日系

アメリカ人自身私たちの政府の権利の権利の侵害によって苦しめられた人々と、その不正を正し、さらに合衆国憲法によってすべて保証された権利を獲得するた

めずつとさまよい続けた人々の物語を語っている。展示は、憲法制度の範囲内での、憲法上の意志決定と、市民活動の過程についての事例研究である。」と説明しています。

最後にこのような環境から生まれるアメリカの博物館のすばらしさをあらためて考えてみると、サイエンスを日常生活の中に持ち込もうとしている努力の中にあるような気がします。別な言い方をすれば学問をひとつの情報として大衆化するのに成功しているのかもしれない。しかし、これらの動きを疑問視する考え方もあることはすでに紹介したとおりです。いずれにせよ、アメリカの博物館見学は忘れかけている博物館自体の魅力を再生させてくれるのに大いに役立つことは間違いないと思います。協会の方々がこれらの機会に参加されることをおすすめしてこの報告を終わらせていただきます。

A MORE PERFECT UNION
JAPANESE AMERICANS AND THE UNITED STATES CONSTITUTION
 A new exhibition at the National Museum of American History Smithsonian Institution October 1, 1987

館園紹介

優佳良織工芸館

大雪山連峰を遙かに望む旭川市街の小高い丘の上に立つ優佳良織工芸館。建物は特徴的な二つの塔屋をのせた重厚なレンガ造りで、その白壁は雪の降る北海道を象徴している。

優佳良織は工房を発足して二十七年、個人の研鑽は四十年に近いが、北海道の伝統文化を考えると、先住民文化のすぐれた伝統文化を除くと開道百年余の歴史は若く、新しい

い伝統工芸を根づかせるための努力が続けている。

優佳良織工芸館は、優佳良織織元・木内綾、館長・木内和博の全作品を展覧する「染織専門美術館」であり、同時に染色、糸つむぎ、機織り、縫製、加工まで、工程のすべてが手仕事による一貫作業をおこなう工房でもある。

敷地面積、約六万平方メートル、本館に染色手紡館、手織研究館を併設した建物の面積、約五千二百平方メートル。計画、準備に十年近くの歳月をかけ、昭和五十五年五月開館。ことし十年目を迎える。

ちなみに「優佳良」とは、故棟方志功先生が名づけられたものである。

優佳良織は、北海道の美しい自然をテーマに創作している。「流水」「ミズバシヨウ」「ライラック」「ハマナス」

「秋の摩周湖」など、北国の風土の香りを染織する一連の作品は、一つの作品に二百色から三百色以上もの多彩な「色」を使って、油絵のような表現を試みている。織りの

素材は羊毛である。

優佳良織工芸館はこのような地域と密接に結びついた工芸を展示する場として、北海道の木と土でつくられた。やや赤味の強いレンガは北海道の土で焼成され、内部の木材はすべて北海道産の天然木を使用している。優佳良織の展示室はテーマ展示室、和の展示室（和装用のもの）、洋の展示室（洋装全般）、インテリア展示室、制作工程室に分かれているが、それぞれの部屋がハルニレの埋木、オンコ、ヤチダモ、オニグルミ、ミズナラと、北海道を代表する樹木で構成されていて、北海道を織る「優佳良織は、北海道」の中に展示するという理念で貫ぬかれている。

「私は自分の織物も、また織りを展示する工芸館をつくる時も、一つの物差しをもっていた。その物差しはひとことというところ、百年に耐えられるか」というものである。この織りが、この工芸館が百年の視線に耐えうるものかどうか、継続しうるかどうか、と

常に考える。「木内綾『百年の重み』——より。工芸館を建てるのに新建材ではなく、苦心して天然木を集めたのもその一つの例である。殊に、千年以上も大雪山系の土中深く埋もれていたハルニレの埋木を用材としてよみがえらせた建築は、他に例がない。



佳良織と対比しながら、染織文化のそれぞれの特徴を鑑賞していただきたいと考えている。

《優佳良織工芸館案内》

所在地・070旭川市神居町高台
電話番号・〇一六六一六二一
八八一—

開館時間・午前九時～午後五時三十分（五～十月）、午前九時三十分～午後五時（十一月～四月）。

休館・十一月～三月の月曜日、年末年始、（四～十月は無休）。

入館料金・一般三十円、高大学生百六十円、小中学生百十円。国際染織美術館も同額、両館共通割引券あり。

交通・JR旭川駅から車で十五分、バスで高砂台入口停から徒歩八分。

（優佳良織工芸館

副館長・大山茂）

事務局からのおねがい

本欄に紹介いただける新加盟館園等がありましたら、事務局まで御一報下さい。



美幌博物館

美幌博物館は現在建設中の「みどりの村」(平成六年完成予定)の中核施設として、美幌町開基一〇〇年を記念し、昭和六十二年十月にオープンしました。

この「みどりの村」は総面積約三十七畝の山林の中に各種の施設を配し、町民が憩える緑を残し、緑の山で体験し、学び、遊べる広場として建設が進められています。

博物館は「みどりの村」の中核施設とただけではなく、



美幌町の博物館教育の拠点として活動する館を目指しています。

また当館は、美幌町の主要産業である農業について理解を深めるとともに、新しい農業技術の研修など、農業者に対する農業教育や農業従事者以外の人に対する農業の啓蒙を目的とした「美幌農業館」が合築されています。

博物館の展示は「川と人間」を主テーマとし、七つのコーナーに分け展示しています。自然のコーナーでは、美幌川にはぐくまれてきた動植物

の様々な生態をジオラマで紹介しています。地上部では初夏の森林・草原・川のような地下部では動物の冬越しや樹木の根のようすを見ることが出来ます。

このほか、火山活動や美幌の地形・地質のコーナー、大昔の美幌のコーナー、アイヌ民族の生活や文化を紹介するコーナー、開拓当時のコーナーなど、美幌の先人達の生活や自然を紹介しています。また農業館の展示は大きく

一階と二階に分かれています。一階は農業を知り、感じることが主眼にし、子供達が「絵本」を見るように楽しく見て、触れて、体験できる展示となっています。

農業館二階の展示は加工工程や、バイオテクノロジーの紹介、農業従事者が「専門的知識」を深め研修する機能を持っています。

また美幌農業の現状と未来像について映像資料を中心に展示しています。

所在地・網走郡美幌町字美禽二五三―四
電話番号・〇一五二七―二二六〇―二二六二
開館時間・午前九時三十分から午後五時
休館日・毎週月曜日、毎月末日、国民の祝日(五・十月を除く)・年末年始(十二月三十日)翌年一月六日)
入館料・大人三百円、小学生二百円、小、中生百円、団体二十名以上は二割引
(美幌博物館 学芸員 小林 敬)

また農業館の展示は大きく

北海道文化財研究所

北海道文化財研究所は、北海道の文化財の保存、保護及び活用について、調査研究する民間の研究機関として、昭和五十八年四月一日から札幌市に創設されて、丁度満六年を経過しました。

この研究所は、札幌市中央区南九条西一八丁目二番地一―二号に所在し、建物は、プレハブですが、敷地約六〇〇㎡に約三〇〇㎡の研究舎で、そこには、管理棟のほか作業室、調査室の二棟となっており、ります。

北海道文化財研究所の業務内容としては、文化財の保存保護に関する研究や、遺跡の発掘調査及び遺物の整理、文化財に関する研究会、講座等の開催、文献等の収集刊行を業務としておりますが、当面の主たる事業としては、北海道電力株式会社が、泊村に建設している泊原子力発電所の建設敷地内にあつた埋蔵文化財調査の業務委託を受けて、

関係遺跡の発掘や遺物の整理作業等を進めているところで、この団体の性格は「人格のない社団等」として、関係官庁に届出をしています。

当研究所の組織としては、高倉新一郎、峯山巖初代所長両先生を顧問に迎え、藤本英夫所長以下、職員、臨時職員を含めてその職員総数は、二〇名の役員で組織し構成されています。

創設以来の事業の実績としては、泊・共和地区埋蔵文化財の発掘調査を終了し、その調査整理と報告書の刊行は、別記のとおり実施し、予定し





ております。そのほか、文化財の調査研究では、昭和六〇、六十一年度において積丹半島における袋調の調査を実施し、その報告書を昭和六十一年度に刊行しました。また、昭和六十三年度から積丹半島の袋調の調査に関連して、漁具の調査も実施中ですが、その報告書についても刊行を予定しています。

さらにまた、機関紙「ひばり」を発行したり文化財保護講演会等を開催して担当者の研究等の一助にも寄与しています。

なお、報告書は実費頒布し

昭和63年度に開館した館園リスト(本紙紹介分)

- ① 北方歴史資料館 3月開館
(函館市末広町23-2 ☎0138-26-0111)
- ② 三松政夫記念館 4月開館
(有珠郡壮瞥町滝之町184-12 ☎01427-5-2365)
- ③ 幌延町郷土資料展示室 5月開館
(天塩郡幌延町字幌延102-1 ☎01632-5-2977)
- ④ 炭礦と鉄道館 6月開館
(阿寒郡阿寒町上阿寒 ☎0154-66-2857)
- ⑤ 忠類ナウマン象記念館 8月開館
(広尾郡忠類村忠類 ☎01558-8-2826)
- ⑥ 栗山町開拓記念館 9月開館
(夕張郡栗山町角田60-4 ☎01237-2-6035)
- ⑦ 厚岸町海事記念館 10月開館
(厚岸郡厚岸町港町50-1 ☎0153-52-4040)
- ⑧ ヴェネツィア美術館 12月開館
(小樽市堺町5-27 ☎0134-33-1717)

年度	発掘調査跡名	発掘面積
昭和五七年度	堀株1、2遺跡	遺跡の中心部
五八(河口カルウス、茶津遺跡)	二二、二六、二七	八三三七㎡
五九(宮丘、茶津貝塚遺跡)		
昭和六〇(宮丘、河口カルウス、茶津遺跡)		
六二(茶津、茶津貝塚遺跡)		
六三(茶津、茶津貝塚遺跡)		
平成元(堀株、茶津貝塚遺跡)		
二(四堀遺跡)		

ています。希望の方は、ご連絡下さい。

(北海道文化財研究所案内)
所在地 札幌市中央区南九条西一丁目
電話 ☎〇一(五五二)四四六一
勤務時間 午前九時より午後五時まで
交通案内 市電(西線)九条下車徒歩約七分

事務局日誌

〔平成元年〕

1・10 北海道新聞宇野均記者、道内の企業、個人経営博物館等の動向取材のため来訪(同紙1月26日夕刊で紹介)。日博協庶務、自然史部門研修会視察館に協力依頼

1・31 「道博協ニュース」第25号発行

2・9、10 日博協博物館指

導者研究協議会一庶務、自然史部門、道博協共催一釧路市で開催(現地視察は網走市まで)

2・21、23 北方民族文化シンポジウム(道博協共催)網走市で開催

3・31 道博協第三回役員会開催(於札幌市・スノー会館、役員12名、事務局4名出席、昭和63年度事業、会計報告、平成元年度事業計画、予算案、第28回全道大会実施計画等について協議)

シリーズ第一集、B5判変形50頁、士別市立博物館、元年3月(士別野鳥観察ガイドマップ、野鳥の見つけ方、道具と服装、野鳥用語、野鳥のからだの呼び方など)バードウォッチング入門者の格好のガイドである。

◇社会教育研究部日より「北海道立教育研究所」、B5判ワープロ印刷23頁、元年3月(その人なりの生涯学習一笈川定美、「家庭・地域との連携を図る視点は何か——村田甚蔵、他所収)

寄贈図書紹介

◇アイヌ民族博物館研究報告第二号、A5判92頁、元年3月(帯広・伏古におけるチセと附属施設について……内田祐一、生木によるアイヌの工法……成田ウタリアン、ヴェルヘルム・ヨースト「世界旅行記」におけるアイヌ民族の記述……小坂洋右、レニングラードの博物館におけるアイヌコレクション、A・B、スベヴァコフスキー)

◆士別の野鳥観察 郷土学習

会費納入のお願い

本協会の円滑な運営のため平成元年度の会費の納入を左記によりお願い致します。

(会費)

団体会員 一五、〇〇〇円
個人会員 三、〇〇〇円
(取扱金融機関)

北海道拓殖銀行 新さっぽろ支店 普通 〇一八六一二八七〇〇〇

郵便振替 小樽七二二九四一九